

国木田独歩の佐伯での生活

(十)

山内武麟

(賛助会員・佐伯市山手区)

二十三日の記には真面目になりたいたいと考えているが、
々なれないと省みている。

真面目な生涯を送り、真面目な勉強し、真面目な苦心
をすることを義務と感じ、人生を考え神を信ずることが
人の本分ではあるまいか。しかしよく見るとこの世の中
には真面目な人は甚だ少ない。すること云うこと、務め
ること企てることは大概惰性により習慣により、また慾
にかられてするのが殆んどである。自分もそうである。
人はどうして真面目になれないのか、言うまでもなくシ
ンセリテイでないからである。

と、自省し、真面目な誠実な人になりたいと願って
いる。

次に人がこの世の様々な生活の様子を記してある。
牧夫の生活、海士の生活、農夫の生活、僧侶の生活、

学者の生活、詩人の生活と色々あり、そしてその一つ一
つにまた種々な変化がある。この様に様々である。しか
もみな等しく地の上、天の下で、同じ月に照らされ、日
に照らされ、同じ花を見、同じ空気を呼吸しつゝある。
大自然に対する人としては何の変りない。その生活や境
遇のちがいで人間の間には大きな差異があるように、大
きな溝があるように感じさせるのである。

まことに不思議である。

二十四日の記



愚にせよ、賢にせよ、余は一個のなり。独立の星な
り。其分あるなり。実其意味をもつなり。死するにせ
よ、ながらうにせよ、兎も角吾は生れたる人間の一個
なり。

と、自覚している。が、しかし自分はどうして農家に生
れなかったのか、英国に生まれなかったのか、北氷洋州
に生まれなかったのか、南洋人として生まれなかったの
か。と不審に思い、

人間々々― 遂に此人間を如何んす可き人類よ、爾
は何を為さんと欲するか。此吾終に何を為す可きか。

と、人の宿命を考え、結局は人はどうなるのか、何をこ
の世で為せばよいのか。と、問いかけている。

二十六日の記

昨日午前中竹取物語を読んだこと、また近頃はウォー
ズウォースの逍遙遊を読みつゞけている。と記して、竹
取物語の読後感を書いてある。

竹取物語を読み吾大に吾国文の妙なるに感じ、此物
語の神韻縹渺として詩想の高きに感ず、かぐや姫の將
に月の宮に帰らんとて、嘆き悲しみ、養い翁の別れ惜
みてもだへ苦む様情こまやかにし言外の妙味実に吾を
して幾度か巻を掩ふて泣かしめぬ。

と、感想を書き

見よ、月は依然としてある。茫茫とした天地も依然と

している。しかし今竹取物語の作者の人々はどこに
か、あゝ月の美は変りない。父子の情も変りない。恋愛
の情も変りない。しかし千年前のこの物語の時代は今ど
こにあるか。

と、追想して、

嗚呼美や情や、將たこれ永遠の御心なるか。吾竹取
を讀みて実^{まこと}に時代、自然、人情の靈妙なるハーモニイ
を感ずる也

と、この作に感銘している。独歩はこの物語に魅了され
て、これに関する新体詩を幾つか書いてある。

次に一昨日の夕方弟収二と一しょに葛港の海辺まで散
歩したことを記してある。

家を出て櫓の道（曰坪道）を通過して港道に出てとうと
う葛港の波止場の鼻に立った。

磯にさゞめく小波の、月にてりゆるやかに又た美し
のり捨てし小舟の舷^{ふなぶち}に月の光の落ちたるあり。嶋々
の影黒く海面に映じて、其の暗き処、波、光にだけ
て錦の漂ふに似たり。

と、月に照り出された港の風情を叙述してある。

次にこの道の行き帰りに見たものについて記してある。

港道の左側は山、右側は水田である。山の麓のところどころに農家がある。その一軒で月の光をたよりに庭の隅で湯あみをしている男を見た。

と、あるが、これで解るように、昔佐伯駅が出来る前までは道路は蟹田から平野沿いに今の駅裏にあって、道路に沿って水田が開けていた。

そして、水田が尽きたところと川岸、海辺に塩田があつて三、四軒の塩たき小屋があつた。

水田尽き、川岸と海辺とに三、四、塩たく小屋あり。其の屋根のとがりたる影より白煙少しばかり、月をうけて静かにたち昇るを見たり。すべて寂莫たる景色なりけり。

と、独歩は塩田風景を描写してある。

現在の日の出区から川岸、海岸にかけて広い塩田があつた。川岸と海辺の土堤に塩たき小屋が六軒あつて、一番、二番……六番と呼んでいた。この塩田を普通塩浜と呼んでいた。今は全くその面影もなく住家が建ち並び街となつてゐる。

次に蟹田がんだの様子を記してある。

港道と樋の堤との間に一村あり。家数も十四五に充

たぬなる可し。其の一つ、水のほとりに右に建つ家は船大工なり。近頃造りかけの船、山の根に横へあり、新木の香に月の光しゅみて、あたり人なく、甚だ懐しき者なりし。一軒の例の鍛錬工かじの槌の音、ふいこの聲あいかわらず響き居たり、昼間見る小供等見へず、家々静かなりけり。

と、昔の蟹田の光景をよく捉えている。この記にあるように船大工、かじやがあり、その外桶屋も二軒あつた。次に木曜日二十三日の夜のことを記してある。月の光が夕べの香をこめて照り初めし頃たまらなくなつて、弟を連れ家を出た。

船頭せんとう河岸に出てたり。昼間のさわがしさに似ずいと静かなり。

と、船頭河岸の池船橋の畔に行つてゐる。昼間のさわがしさはない。こゝは昼間は浦まえのおろし舟が沢山集つて大賑いを呈していたのである。

白馬が一回繋いであるのを見た。馬子が来てひいて石段を下つて渡船にのせようとする。馬はおそれて舟に乗らない。二、三人の人が船と岸とからあやぶみながら見ている。馬はようやく乗つた。月の光は已に川に満々て

いた。海岸の石段の上にある理髪所の燈がかゞやいてい
る。その前に四、五人の子守りたちが集って背負った子
供にゆすり乍ら子守歌を歌っていた。声はあわれそうで
ある。

渡船河の中流に出でし時、斜めに下流の空より射す
月の光を受けて馬白く人黒く舟危く、古色ありて、今
眼前に眺め乍らも懐古の情と等しく一種の哀れを感じ
ぬ。

と、月の光をうけて馬を乗せた渡船が川を渡る情景を見
た感じを記してある。

渡船がまた帰ってきたので独歩兄弟は乗って向う岸に
渡っている。先日の洪水で流失した池船橋の杭が川の中
に残って立っている様は趣きをそえていた。

渡しを渡ると堅田道である。水田と河の入江との中を
貫いて通じる真直ぐな道には家は一軒もない。そしてこ
のあたりの光景を次のようになっていた。

此処野辺甚だ開けて山々のふもとを去るや、遠く、
蒼煙はるかに地上をこめ月光白く空にみち、人なく声
なく、山黙々、田の面に、くゞし火燃へ居たり。只だ
独り静かもへ居たり。煙低くはひて月の光これにこも

りて蒼く甚だ寂莫をたすけぬ。

と、当時の池田の月夜の夜景を描写している。この頃は
家一軒もなく田野がひらけていたのである。今は家が建
ち並びこんな風景を全々眺めることは出来ない。

独歩はこの景色を眺めて一首の歌を詠んでいる。

冬枯れの野辺に主なく燃ゆる火の

煙は月の光ならまし。

次に昨夜のこと、友だちに手紙を書いて終った時はも
う夜は更けていた。その夜更けに

月の光のみ醒めたり。声あり、口笛なり。何処の少
年ぞ、可憐なる。

と、情景を添えてある。

二十七日の記には前日の二十六日のことを記してある。

昨日は日曜日で午前、二十六日の日記を書き終るとす
ぐ教会堂に出席した。そしてコリンタ前書の十六章を読
み、一席の感話をした。「なんぢら目を醒し堅く信仰に
立ち大夫の如く剛かれ」の句について話した。

午後は収二と一しよに土河内村（津志河内村）を訪ね
た。その記を次に書いてある。

堅田トンネルの前で左に小路をきり小山の間の小さい坂を越えると、一軒の農家が山の麓にあった。一人の男と二人の少女、それに妻とが麦撒きの畝作りをしていた。少年がいる。この家族の一人であろう。藁の積み重ねた間から頭を差し出して人々の働くのを見ていた。

渡を渡って広い野に出た。農夫が幾も畝に出ていた。麦撒きの忙がしい時だから女も男と一しよに働いていた。

そして次に津志河内の村の様子を

山の麓に見ゆる一村は其の谷に迫まりて他所と並ばず特別に世より離れて一村を作る如く見ゆるが故、遠くより望みて何となく懐しくなりし也。嘗て山の頂より眺めし時、煙立ち昇るを見て已に何となく懐かしかりし也。

と、記してある。自分の室から、また城山の頂上から眺めてこの村が懐かしく見え、一度訪ねたいと思っていたので、この日訪れたのであろう。

村に近づくに連れて農夫の数が多くなった。犬がわれらを見慣れないのではげしく吠えた。

そしていよいよ懐しい村の中に入って、その様子を

村は村なり。懐かしき村なり。小供等の遊ぶに遇ひ

ぬ。馬の嘶くを聞きぬ。而も甚だ静かなるを感じぬ。壮丁庭先きに何事が働き居たるを見ゆ。井戸の傍に少女を見たり。水枯れし小川の岸に梅の古木並び立ちぬ。柿果星の如く其間に點ずを見たり。紅葉燃ゆる如く一叢の竹林の間に樹つを見たり。

と、記して、その村に対する感じを色々と想像しながら書いてある。

此の村を同情の心で人間の住所として観察したら、いろいろな悲しいこと、貴い、深い物語があるであろう。生死も見舞ってくる。時代もこの村を変えるであろう。恋も恨も慾も友愛も義理もみんなこの村にあるであろう。どんな楽しみをこの村の若者は夢見ているであろうか。どんな望みをこの村の乙女たちは夢見ているであろうか。真夜中にこの村に集まってくる天使は幾人か。悪魔は幾人か。詩神は果していつこの村々の家々を訪うのであるうか。春か秋か、夏かまたは冬か。あゝこの村で生滅した魂は今どこにあるか。

と、懐しく色々と想像している。

そしてこの村の奥の谷間を探勝している。

益々奥深く分け入れば村窮まりて只だ溪流のみぞ愈

々谷深く流れ来るなり。流に沿ふて上る。石に腰掛け足の下に咽ぶ水流を聞き、山谷の幽邃なるを聞き、小鳥の林間に囀ずるを聞く。かくして自然に近づきぬとある。

帰路は夕陽が田野に満ちていた。白帆を川風にはらませて上流へのぼる舟がある。舟の人よ、おん身たちの家はどこか。おん身達の物語を聞きたい。この川をのぼり下りした人はもう幾人あつたらう。川は依然として流れているが人は老いていく。しかし人情の妙なことは老くない。美は亡びない。人の永久の生命は老いることはない。

と川船の往来を見て色々と想像しながら感懐を述べてある。

昨夜は二階の自分の室から下りて坂本老人と色々と話している。このことは

佐伯に一個の老翁あり。奇怪の者を担ふて行くをし
ばしば見受けぬ。此老翁の事を問ひ、多少聞き得たり。

此翁同情に堪へず何れの時か遇ふて親しく語る可し。と、よく出会う奇怪なものを担いて行く老人のことを聞いている。この老人は当時岡の谷の避病院の番人をして

いたらしい。毎日荷物を担いで山際を通って当時大手前にあつた町役場に通つていたとのである。

昨日、船頭河岸でまた例の乞食に会つた。彼は噂のようにごみ捨て場の汚物をさがし、何か拾つては口に運んでいた。収二に柿を一個やらせる。

余問ふ汝き乎。答ふ、甘いと其声、只だ其れ味いと
言ふ言葉の外の情を含めず、声、調子、様子、只だ言
ふ甘い、感謝の意もなく大喜悦の意もなく失望不平の
意もなし。只だ言ふ甘いと。哀れむ可き哉。
と、乞食紀州の様子を記してある。

この乞食に年が十八九歳だと学校の生徒から聞いた。
昨夜また坂本老人からこの乞食のことを聞いた。自分か
ら紀州の者だと云うのでこの乞食を紀州と呼ぶとのこと、
また彼に親があるのかないのか知らない。もう大分以前
から佐伯に在るとの事を聞いた。

彼の老翁、此乞食、共に悲しき物語ならずや。吾が
「潔」は甚だこれを感じぬ。
と、結んである。

この「潔」とはよく解らないが、独歩の作品中に「潔
の半生」「潔白記」と佐伯を舞台にした小説がある。こ

の潔は独歩自身のモデルであることから察して、これは独歩の仮称であるらしい。

この晩、坂本老人との話合いの中に今一つの話があったことゝ察しられる。

それは小説「春の鳥」の主人公六蔵についての話である。

小説「春の鳥」の前作とも考えられる作品に「可憐児」と題する小説がある。(遺稿の補遺として国木田独歩全集十巻に所載)

この「可憐児」の冒頭に「明治二十六年十一月二十八日始ム」と記して、本文に入っている。

一昨日は日曜日なりき。其夜二階を下りて坂本老人と物語す。坐に嫌と収二とあり。互に四面の噂に笑声続く。最も楽しき晩なりし也。

と、書き出し、乞食紀州の噂話などした後、坂本老人は

さて先生、吾が家にも一個の愚者あり。已に御存じの如し。其の愚かなる事譬へがたき程なり。如何にすれば宜しきか。殆ど當惑致し居る也。先生別に御工夫もなきものに候や。

と、相談をもちかけられた。

これは期日が欺かざるの記の二十七日の記と合致する。この話があったことに間違いないと思う。

この相談をもちかけられた独歩は返答に困ったが、この憐れな子には心から同情していた。この少年は実名を山中泰雄と言ひ、坂本氏の実子ではなく、氏の妹の子であった。その妹は寡婦となつてこの少年とその姉にあたる娘との二人の子供を連れて、実家の坂本家に帰り寄寓していたのである。

独歩は生来同情心が厚く、特にこのような白痴や不具者に対しては日頃から強く同情していたので、出来るものやらわからないけれどもやってみましようとして承諾した。そして、先ず手始めに

高等小学校の門前に伴ひ、其石階を踏み登りて階段を数へしむ。一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つと数へて登りぬ。吾問ふて曰く幾段なりしや。十二なりと答えて平然たり。否八つならずや、自ら八つと数へ乍ら十二と言ふは可笑と言へども、彼に少しも通ぜず、教へて曰く、高等小学校の石階は八つなり。記憶せよ。と、彼しばらくは八つと答へて記憶

したる如くなりしも、幾何もならず、問へば已に忘れ
了りぬ。

と、数を数えることから教えようと、すぐ近くにある（
山際のお倉跡、今の法務局跡）高等小学校に連れて行き
入口の石段の数を教えてみたが、数の観念が全くない。
教えてもすぐ忘れてしまう。全く著にも棒にもかからぬ
白痴である。流石の独歩も全く手に負えなかった。

以上が「可憐児」の荒筋である。

独歩の遺稿中に「憐れなる児」と題する小説があるが、
その内容はこの「可憐児」と殆んど同じである。

このことは事実である。「春の鳥」の主人公六藏即ち
山中泰雄と独歩との関係については、独歩の「病床録」
の第四芸術観の中に「春の鳥の少年」と題して述べてあ
る。また評論「予が作品と事実」の中にも「春の鳥」と
題して、事実あったことである。と記してある。

しかし、独歩はこの白痴の少年について、「欺かざる
の記」の中にはたゞの一行も書いてない。自分たちが下
宿して世話になっている坂本家のことであるから考慮し
たのであろう。独歩の人がらが察しられる。

二十八日の記には

詩はイマジネーションとシムパッシーとが生む処の
子なり。

と、記してある。イマジネーションは想像、シムパッシ
ーは同情と訳するのであろう。

二十九日の記には

昔から今日まで、予言者により、詩人により、哲学者
によって叫ばれた人生の警句は何か、この天の下地の上
で人間によって説かれた警句は何か。と問うて

愛の神聖なり。自然の美妙なり。靈魂不滅なり。労
働の神聖なり。神の信仰なり。亡びざる希望なり。と、
答えている。

そして古来今日までこの世の中で踏みなれて、迷うて
陥ちた穴は何か。と問うて

社会生活の虚栄なり。天地自然に対する盲目なり。
と、答え、この二つは凡ての罪惡の父母である。盲目で
あるから虚栄となり、虚栄であるから盲目となるのであ
る。この二つはあらゆる暗愚と罪惡とを生むのである。

と警告してある。

三十日の記には反省した記を書いてある。

あゝ自分は一人の囚人のようである。毎日苦しんでいることは何か。苦しんで何を知ったか。つまらない思いをつづけている。自然は何も語ってくれない。毎朝起きては苦しいむだなことを繰返し、夜は眠って夢に魂を驚かせている。農夫を羨むが農夫にはなれない。古人を慕っても古人を見ることは出来ない。理想を仰ぐがたゞ漠としていて夢よりも空しい。信仰の火は少しも変らず薄弱で、自然や人生を観る眼はやはり愚かである。空想を希望として自分を欺いている。自分は一人の囚人である。囚人であるにつくづく感じる。自分とは何か。自分とは汚れと愚との結晶体ではないか。と、自分自身で苦しみ悶えている。

そして

吾は恋人を要す。吾は誰れにか愛せられ、吾又た誰れをか恋ひせずば此労苦なる命の寂寞を感じず。恋愛の聖なる化身か来りて吾を此囚人より救へ。竹取物語のかぐや姫を思ふ時は身も魂も飛んで天辺に月に向ふてあくがるゝ也。アゝ愛の神よ。吾を此寂寞無情の窮囚より救ひ給へ

と、愛、恋愛を求めている。

七年ぶりに会費値上げ 年間会費二五〇〇円に

史談会会費は昭和五十五年に活字印刷誌となった時、会費年二〇〇〇円に定めて以来、満六年間維持して来ました。その間、諸物価の上昇、郵便料値上げなどにより苦しい台所でしたが、会員の負担をなるべく軽くするという会の建て前から値上げを押さえ、会員の奉仕活動によつて何とかやりくりして来ました。

しかし補助金の糸口も切れ、このままでは会の活動に支障を来たすおそれが出てきましたので、やむを得ず五百円値上げして二五〇〇円にすることになりました。

七年振りの値上げです。会員の皆さん、事情をご賢察下さいまして、ご協力下さいますようお願い致します。

〇会費を前納下さっている方は、そのまま結構です。